

第 42 号

● 目次 ●

巻頭言：地域を研究することとフィールドの意味	1
フィールドワーク	2-7
・ロシア連邦チュコトカ自治区北東部の地質調査	2
・台湾の公文書館	3
・長春の新学期	4
・西シベリアでの生態学調査のロシア事情	4
・オーストラリア・アボリジニ調査の旅	5
・内モンゴルとの研究協力	5
・ロシア・ウラジオストクとナホトカ港	6
・スタンフォード大学フーヴァー研究所のロシア史関連史料	6
・中国の温暖化対策は進んでいる！	7
客員教授紹介	7
活動風景	8
編集後記	8

巻頭言
地域を研究することとフィールドの意味

東北アジア研究センター教授 岡 洋樹

地域研究は、フィールドでの調査を不可欠とする学問分野である。しかしせまい意味での地域研究ばかりでなく、およそ人の社会を研究しようと思えば、研究対象の中に一度は入って、それがどのような人々で、どのようなところに暮らしているのかを見ておくことが必要となる。筆者が専門としている東洋史でも、近年フィールド調査の方法を採り入れることの重要性が叫ばれるようになっていく。しかし一口にフィールド調査といっても、分野によってその意義はずいぶん異なっている。とくに歴史のように、研究対象が既に存在しない過去である場合はなおさらである。対象とする歴史事象が発生した現場に入ると言っても、それはすでに長い年月を経ているわけで、タイムマシンでもないかぎり、真の意味で歴史研究のフィールド調査が可能なのではないからである。それでは歴史研究におけるフィールドとは何なのだろうか。私は二つのことが言えるのではないかと思う。一つは、史料を読む時に必要な地理的な知識やその土地の風土を知ることである。私はモンゴルを研究しているが、島国の人間には、草原の広大な広がり、そこで暮らす人々の中に流れる時間、生業の在り方などを身を以て体験することは大いに役に立つ。もう一つは歴史研究の性格に関わる。つまり歴史研究とは、何か過去の「客観的事実」をそのまま再現する作業ではなく、過去について、史料に基づいて説明可能なストーリーを組み立てる作業なのである。その場合、いかなる視点から、どのような態度でこれを構築するのが問題となる。それが独りよがりの独白にならない

ためには、現地の人々（庶民も学者も含む）が自らどのような歴史認識を有しているのかをなるべく多面的に知ることが必要である。そのために我々は、対象となる地域の人々と会い、彼等が物語る歴史を聞くのである。それが我々歴史研究者にとってのフィールド調査なのだとと言えるだろう。

私は地域研究に歴史の理解は不可欠だと思っている。それは地域の人々の今は、歴史的に形成されたアイデンティティーに支えられ、方向づけられているからである。史料を精密に解読することを通じて獲得される歴史の知識を、カレントな事柄に結びつけることができ初めて、地域を十分に理解することが可能だと思うからである。



モンゴルでの筆者

◆◆◆ フィールドワーク ◆◆◆

ロシア連邦チュコトカ自治区北東部の地質調査

本年6月29日から8月14日まで、日本学術振興会（JSPS）とロシア基礎研究基金（RFBR）が出資し、私を日本側代表とする日露共同研究「アジア北東端のオフィオライトと随伴岩類：北極圏東部の岩石、構造、広域地質対比」の現地地質調査を行うため、ロシア連邦チュコトカ自治区エグベキノート村北方～北東方地域を訪れた。私と同行の金沢大学大学院生、町澄秋君は新潟空港からハバロフスク経由（2泊）でチュコトカの首府アナディール市までウラジオストク航空のジェット機で移動し、そこでロシア側の4人と合流した。ここまでは予定通りだったが、今年の夏は日本だけでなくロシア北東部も異常気象で、7月に入っても厚いコートが必要なほど寒く、海には流氷が漂い、エグベキノートとの間の定期連絡船が出航できなかった。地元地質局で情報を仕入れたり、地元新聞社の取材に応じたりしながら日を過ごし、結局交渉の末7月9日に石炭運搬船に同乗して出航できた。約300kmの距離を、船は流氷をかき分けながらゆっくり進み、翌日の昼頃エグベキノート村に到着した。立派な港湾設備のある人口数千人の村である。ここからビジホートと呼ばれる無限軌道貨物車（愛称terrible car）に荷物と我々を満載して、11日に約60km離れたマタチンガイ地区の第1キャンプに移動した。ここはアルプスの山中を思わせる風光明媚な場所で、湖畔の無人のコテージに宿泊した。強風と冷たい雨の中、最初の2日間の山中の調査は特に厳しかった。そのためか、15日の朝、同行した町君がコテージの外で吐血して昏倒した。ロシア側が衛星携帯で医師の指示を受けながら私が看病し、17日にエグベキノート村に戻って病院で内視鏡検査などを受診した。「急性の胃・十二指腸潰瘍だが、もう心配ないだろう」という医師の診断で、そのまま調査を続けることにした。医師は英語が話せる親切な人で、医療費は一切受け取らなかった。翌18日、路上で偶然この医師に会った時に、彼は我々の記事（図1）が載っている新聞を持っていて、我々を励ましてくれた。この日の夕方、北東方の調査地に向けて再度出発した（北極圏に近いので深夜まで明るい）。雪道の峠越え、ツンドラ湿地帯の走行、長雨で増水した川の横断などに手間取り、約200km離れた第2キャンプに着いたのは21日だった。途中、チュクチ人のキャンプに寄ってトナカイの肉と紅茶を御馳走になった。第2キャンプ以後はテント生活となったが、テント設営の際に私がギックリ腰を発症し、2日間休養の後、日本から持参した湿布薬とコルセットで痛みを我慢しながら調査する羽目になった。これ以後荷物の運搬やテント設営などの手伝いができなくなり、他のメンバーに迷惑をかけてしまった。第

4、第5キャンプは北緯67度前後にあり、北極圏に入るが、7月末頃から天気は比較的良好になった。しかし、連日の酷使のためか車に機械的なトラブルが頻繁に発生するようになった。8月6日に第5キャンプを撤収し、ツンドラを横切ってアングエマ村に至り、そこから道路を歩いてエグベキノートに戻った。日本への帰路は、8月9日に石炭運搬船に乗り翌日アナディール着、12日にジェット機でハバロフスク着（ハバロフスクの悪天候で3時間遅れ）、そして14日に新潟空港に着いた（同じ理由で2時間遅れ）。47日間の旅行であった。

この調査の成果は、第1キャンプでアジア大陸最東端のオフィオライトを確認したこと、第3～第5キャンプで多量の輝緑岩が貫入する三畳紀の地層が圧縮変形と変成作用を被っていることを確認したこと（アラスカと同様に「北極大陸」の衝突による造山運動を示唆する）などであるが、採集したサンプルが年末頃に日本に届く予定なので、それらの分析による更なる成果を期待している。

ロシア側参加研究者の代表セルゲイ・D・ソコロフ教授、実務全般を取り仕切ったガリナ・V・レドネバ氏、その夫のボリス・A・バジレフ氏、大学院生のアルチョーム・V・モイセエフ氏、運転手のセルゲイ・ニコラエフ氏、そして他の多くの協力者に感謝する。

（石渡 明）



図1. 我々の地質調査について報じるアナディールの地方紙クライニー・セベル（「極北」の意）7月10日号の記事。見出しは「我々の時代の1億年前は・・・」。

台湾の公文書館

台湾は北回帰線の南に位置し、一年を通して仙台よりも涼しいと感じることはほとんどない。冬などはダウンジャケットをしっかりと着込んだ台北市民に混じって、シャツを腕まくりして街を歩く自分が浮きまくっていることを実感する。台湾研究が専門でもない私がなにゆえ台北に足繁く通うのかといえば、ここには20世紀前半の中国を知る上で貴重な歴史資料が存在するからである。これらは1940年代後半の国共内戦の結果、中国国民党により台湾へ移されたもので、国民党が大陸を統治していた時期の重要文書が多くを占めている。1990年代に入って、李登輝政権下での大陸反攻政策の終結などを背景に、大陸政権時代の公文書の一般公開が急速に進み、激動の中国近現代を考察する上で公文書は格好の歴史資料となっている。台湾にはこうした公文書史料を所蔵・公開している機関がいくつかあるが、ここではその一つである国史館の紹介をしたい。

国史館は台北市より南の山間部、茶所で有名な坪林への道中にあり、利用に際しては地下鉄やバスを乗り継ぐことになる。海峡を挟んで国共双方が砲火を交えた時代の危機感を彷彿とさせるロケーションである。国史館は山の斜面に立てられた複数の建物から成っており、守衛所で入館手続きを済ませたのち、閲覧室のある建物に向かう。ここで閲覧希望の資料を請求し、一日四回の出庫時間ごとに原資料の入った資料箱やマイクロフィルム等の複製媒体換算で10点までの資料を閲覧することができる。閲覧室は静かであるが、時折道路を通過する車やバイクの音、そして昼過ぎには夕立の雷鳴や短時間とはいえ激しい雨音が聞こえてくる。

国史館が所蔵する資料は1930年代から40年代にかけての公文書が中心で、特に「蔣總統中正文物」が有名である。これは国民党の領袖であった蒋介石に関する文書や写真、物品等の資料で、特に文書類は政府文書とは別に蒋介石と中央・地方の主要人物との間で交わされた報告書や電報、書簡などから成っており、国民党政権の政策決定過程を知る上で極めて貴重な歴史資料である。長らく国民党の施設に保管され閲覧が困難だったこの資料が1990年代に国史館に移管されてから、台湾の研究者はもとより、中国大陸の研究者や私のような外国の研究者もこれらの貴重な資料を閲覧すべく、国史館に足繁く通うようになっている。

ここ数年来国史館では公文書資料の電子化に積極的であり、デジタル撮影された資料の画像を館内ネットを通じて端末上で閲覧する環境の整備が進んでいる。これは原資料の劣化・汚損を防ぐと共に、原資料や複製媒体を書庫から出して閲覧する場合に生じる出庫時間や貸出件数の制約をなくすという利用者サービスの

一面も持っている。もっとも、重要文書とりわけ蒋介石文書については電子複製が認められていない。結局閲覧者は館内端末のモニタに読みたい資料を一点一点呼び出して、手書きあるいは持ち込みのノートPCへの入力が必要部分を写し取るというアナログ的な作業を黙々と続けることになる。文書の多くは鉛筆や毛筆で書かれたもので、かすれや滲みで読みづらかったり、独特の崩し字や当て字に当惑することが多い。限られた滞在日数で極力多くの資料に目を通し、重要箇所を書き写しておきたいと思うと、昼食と数回の休憩以外はほとんど画面とにらめっこということになる。閉室時間ぎりぎりまで資料を読み続け、帰途に着く頃には目も疲れ腰も重い。何とも健康にはよくない作業である。

このように公文書を読むのは骨の折れる作業であるが、今や近現代中国研究ではこうした公文書資料の活用は当然のこととなりつつあり、若手研究者も中堅も「新資料発掘」を競っている。そうなると疲れを理由に作業のペースを落とす訳にもゆかない。また台湾の政局や中台の兩岸関係が今後の公文書公開に影響を及ぼす可能性も否定できない。もしかしたら閲覧状況が芳しくない方向へ推移するかも知れないという一抹の不安が、時間の許す限り一点でも多くの資料を読みたいという気持ちを強くさせるのである。

交通至便な台北駅前の定宿は周囲が予備校街で、学生相手の安くて美味しい軽食に事欠かない。気分転換に夜遅くまで賑わう界限を徘徊したいところであるが、翌朝再び国史館へ向かうにせよ、仙台行きの飛行機に乗るべく空港に向かうにせよ、起床時間は早い。屋台の小料理をテイクアウトし、後ろ髪を引かれつつ宿への帰途に就くのである。

(上野稔弘)



国史館の全景

長春の新学期

中国東北部に位置する長春市は仙台空港から直行便に乗れば2時間余りで着いてしまう、私たちにとって非常に近い中国の町です。長春にある吉林大学と東北大学は大学間学術交流協定を締結しており、本センターも含めてさまざまな交流が行われてきました。今回日本学生支援機構の帰国外国人留学生研究指導事業に採択され、2009年9月3日から11日まで同大学で研究指導を行いました。私が指導し博士課程を修了した劉四新、鹿琪、私の研究室で助手を務めた馮暉だけでなく同大学地球探測科学と技術学院の劉財院長は2006年に本センター客員教授を務められました。私たちは都市開発に伴う地下埋設物の検知、石油開発のための地層計測などについて電波を利用する研究で交流を続けています。

地球探測科学と技術学院では大学院学生を対象とした3日間の地中レーダ（GPR）集中講義、大学院学生の研究



をセミナー形式での討論、電波を利用した地球環境計測技術の特別講義を行いました。中国では9月が新学期です。劉院長に200名の新入生に地球計測で学ぶこと、日本への留学も含めた大学生活などについて特別講義を依頼されました。中国の大学では新入生に3ヶ月間の軍事訓練が課せられます。訓練から直接教室に来た200名の学生は軍服を身につけ、教室に整然と着席していました。学生の眼差しは終始鋭く、東北大学での通常の講義にない緊迫感を味わいました。



吉林大学には本センターとほとんど同じ名称である東北亜研究院があり、主として経済交流に関する研究が行われています。副院長の尹豪先生、崔健先生はかつて本センターで研究された経験をお持ちであり、国境を越えた民族移動などのテーマについて今後両機関での研究交流活動を進めたいと考えています。

週末を利用して、長春から車で5時間ほどの中国と北朝鮮の国境に横たわる長白山を訪れました。火山地域の高原で雄大な自然が広がっています。日本ではそれほど知られていませんが、空港が開設され観光客誘致を大規模に呼び込もうとしています。山頂噴火口には雄大な天池が横たわり、観光客は中国と北朝鮮の国境線を超えたことに気づかず写真を撮っています。

(佐藤源之)

西シベリアでの生態学調査のロシア事情

私たちはロシアの西シベリアの浅く広大な湖沼地帯で生態学的な調査を2001年から毎年行っています。今回は研究内容ではなく、調査に伴うロシア特有な事情とその変化について私たちの経験を紹介したいと思います。ソ連崩壊後ロシア連邦となった現在でも、入国にはビザが必要です。私たちのような学術調査の場合は、カウンターパートナーであるロシアアカデミーシベリア支部を通して招へい状を発行してもらい、ロシア大使館へビザ申請をする必要があります。初期の頃はアカデミー発行の招へい状でよかったため1週間くらいで受け取ることができましたが、最近では連邦の機関から発行されるように2ヶ月くらい時間がかかるようになり、早めに手続きを開始する必要があります。また、生物サンプルの持ち出しについても、2006年頃から事前の許可証の条件や空港税関での審査もそれまでよりは厳しくなり、書類作成のための手数料も高額になってきています。実際の調査においてもこの10年でいろいろな面で大きな変化を感じます。調査地の湖沼へ行くためには、先に触れました動物

分類学生態学研究所が準備する車で、シベリア最大の都市ノボシビルスク市から西にシベリア鉄道沿いにM51号道などを450kmほど移動する必要があります。2000年前半ではこの動脈の道でも交通量はあまり多くなく、またロシア製の古い車が多いためスピードもあまり出ていませんでしたが、最近では車の数が急激に増え、日本車が多くなったため時速100km以上で追い抜いてゆく車が多くなりました。M51号道は大部分が片側1車線で、追い抜きする対向車からのスリルは増えています。また、湖での調査に使うモーターボートの船外機も以前はロシア製の古いもののため予備機を積んで出発しても、途中で何回も船外機の交換や修理を強いられていましたが、日本製やアメリカ製の船外機になってからはスムーズに調査できるようになりました。このような変化は、ロシア経済の急激な成長と無関係ではないと思われます。経済状況の変化は、ノボシビルスク市内のレストランやファーストフード店の10年間の増加や価格の上昇からも、市内滞在中に実感できます。ただ、サブプライムローン問題による2008年の世界的な不況の影響と現地の人も言っていますが、今年はレストランや店舗の店じまいが目立ちました。

(鹿野秀一)



アメリカ製船外機で調査に行く



湖上で分解したロシア製船外機のエンジン

オーストラリア・アボリジニ調査の旅

今年の7月末から8月下旬にかけて、オーストラリアの先住民であるアボリジニ社会の人類学調査に出かけた。筆者は現在、世界の先住民を比較する科研費プロジェクト（代表：窪田幸子神戸大学教授）に関わっているが、その一環として行われたグループ調査に参加したのである。メンバーはオーストラリア、アフリカ、東南アジア、北米北極、シベリアとさまざまな地域で調査に従事してきた人類学者である。オーストラリア先住民の現状をみることで、それぞれの地域・民族集団の比較の基軸をつくるということが目的だった。

近年、先住民という概念はより柔軟に幅広い意味で使われているが、その核は、当該民族集団以外の人々が後から移住し国家を建設したという歴史的事実にある。オーストラリア政府のアボリジニ対策とその結果、あるいは先住民運動を理解することで、筆者の専門であるシベリア先住民の位置づけを相対化し、世界各地で生成する「先住民化」現象の解明を行なう足がかりを作るのが、今回の調査において筆者が目論んだことだった。

訪問したのは、熱帯気候の北部アーネムランドの海岸部と中央砂漠である。それぞれ一週間から10日ほどの滞在だったが興味深い見聞ができた。筆者はこれまでシベ

リアの狩猟牧畜民で同行調査を繰り返してきたが、「南」の狩猟採集民の生業活動への参加は初めてだったからである。またオーストラリアの北部海域は東南アジアやニューギニアと海によって繋がっているという事実を実感した。さらにアボリジニ・アートの制作現場で関係者から話を聞くことができた。現在の国際美術市場で高く評価されているアボリジニ・アートが、先住民の自立的芸術活動であると同時に、国家の先住民社会保障政策とも深く関わっているという印象を受けた。

旅の終わりには、国立オーストラリア国立大学の人類学者たちとの合同ワークショップに参加した。シベリア先住民の事例研究を報告するとともに、筆者ら他の地域の専門家が今日のアボリジニ社会をどう理解したか、現地の研究者と意見交換を行った。

カンガルーやワラビーの肉も堪能するなど、楽しさまざまな発見に満ちた調査旅行であった。熱帯の海の夕暮れの美しさが今でも印象に残っている。心残りは、海岸部にうじゃうじゃワニが生息しているため、エメラルドグリーンの海なのに十分泳げなかったことである。

（高倉浩樹）



アーネムランド内とある島での女性の岩牡蠣採集



砂漠地域での先住民アトリエ工房で絵を描く人々

内モンゴルとの研究協力

毎年8月と12月に内モンゴルに出かけるのが、私の定例の行事となっている。モンゴルというと遊牧民の暮らすゲルに泊まり、羊の肉や乳製品を食べて、草原を駆け回る、といったイメージが定着しているが、私が通っているのは、フフホト（呼和浩特）という、250万以上の人口を擁し、近代的なビルが立ち並ぶ大都会である。フフホトは内モンゴル自治区の中心地で、確かに万里の長城を越えたモンゴル高原に位置しているが、北京から飛行機でわずか50分、めざましい発展と開発を続けている中国の地方都市の典型である。

フフホトでの私の仕事は、もっぱら文献収集と研究協力の打ち合わせである。フフホトはモンゴル語出版活動の中心地であり、毎年おびただしい数のモンゴル語、モンゴル関係の書籍が出版されている。それらのうち、日本の流通ルートに乗るのは1割にも達しないため、現地の研究者から情報を得て、滞在中はモンゴル語書籍専門店を巡るのが日課となる。

図書館の資料は、入館手続きをして、目的の文献を閲覧し、できれば複写するのが、閲覧の手続きには意外と手間と時間がかかる。最も効率がよいのは、あらかじめ現地の研究協力者に依頼して、文献の複写を作成しておい

て貰い、現地で受け取りの手続きをするやり方であるが、これには事前に協力者と緊密に連絡を取っておく必要がある。

フフホトには内蒙古大学と内蒙古師範大学があり、そのいずれにも「蒙古学研究院」と呼ぶモンゴル学の研究機関がある。本センターは、それらの両方と部局間協力協定を締結している。私のフフホト行きのもう一つの目的はこれらの研究機関のスタッフと会って研究協力の打ち合わせを行うことである。フフホト滞在中は、内蒙古大学の近辺のホテルに居を構え、大学とホテルと書店を往復することになる。

現在、内蒙古大学の蒙古学研究院との間で進行中の研究協力の一つに、『蒙漢詞典』の電子化計画がある。これは、1999年に同研究院から出版された見出し語数53,000語以上、1,500頁におよぶモンゴル語・中国語辞典を、パソコンで利用できる電子化辞書とする計画である。昨年からはまったこの作業は、全文の電子化がすでに完了し、スタッフの間で「試用版」を用いながら改良を進めている段階となっている。

（栗林 均）

ロシア・ウラジオストクとナホトカ港

2009年9月7日から9日にロシア極東地域のウラジオストク市において、国際地理学連合（IGU）の土地利用研究分科会（LUCC）の国際会議が開催されました。本会議は上記の分科会の副会長を務めるロシアアカデミー極東支部太平洋地理学研究所の副所長であるDr.Sergey Ganzey博士の主催によるものです。この会議においては、北東アジア地域の土地利用・土地被覆の変化：持続可能な自然マネジメントをテーマに、ロシア、日本、中国、チェコ、スロベニア、オーストラリアから合計22編の研究発表が行われました。内容的には土地利用・植生変化の衛星観測、農業生産形態の変化と土地利用、河川を通じた海洋環境変化との関連性などが大きなテーマでした。この会議では、本センター大窪和明助教が、都市域の土地利用分類方法に関する私との共著論文の発表を行いました。

さて、地理学分野での会議の通例として、周辺地域への見学旅行が企画されることが多く、今回は9月10日から12日にかけて、ウラジオストクの北東に広がるプリモルスキ県（クライ）の海岸部および山間部への見学旅行に参加することができました。この地域は北緯は北海道南部とほぼ同じで気候や植生も類似しており、スケールの大きな景観が展開していますが、私は特に交通・輸送という観点から、港町ナホトカについてご紹介したいと思います。

有名なシベリア横断鉄道の旅客列車は人口70万人のウラジオストク市を起点としていますが、ウラジオストク港は狭小な金角湾の最奥部に存在する軍港であったために、シベリア鉄道で運ばれた来た石炭や木材貨物の積み出しには約100km東にあるナホトカ港が使われ、ソビエト時代は極東において外国船に開かれた唯一の貿易港でした。ナホトカは背後の標高約300mの山が湾に落ち込んでおり海岸線には平地がほとんどありません。1800年代に700人だった人口が1940年までに大きく発展して、現在の人口は17万人です。500mの幅で奥行き約5kmのナホトカ内湾に面して石炭、木材の積み出し埠頭、水産物の加工工場のほか、造船、船舶補修の施設が並んでいました。港湾施設が海岸線を占拠し、背後の斜面にまで建物が立ち並ぶ様子は広島県の呉港や長崎県の佐世保港とよく似た雰囲気でした。

拡張余地がないナホトカ港では、1971年からナホトカ外湾を挟んで東側にある半島のヴランデル村の海岸を埋め立て、水深20mのコンテナ専用岸壁のほか、石炭、化学肥料の

積み出し設備を整備しています。この港はボストチヌイ港と呼ばれ、極東最大の貿易港として年間1800万トンの貨物を取り扱う能力があります。ただし今回の訪問時には岸壁にコンテナ船はなく、コンテナヤードも4分の1程度しかコンテナがありませんでした。さらにコンテナ港のある内湾の南側のコズミノ内湾に、東シベリア石油パイプライン（延長3500km）の最終積出施設の建設が2008年から進められています。30万トンのタンカーが接岸できる年間5千万トンの取り扱いが可能な施設が、すでに姿を見せています。パイプラインの完成にはまだ時間がかかるようですが、石油を一時的に貯蔵するタンクを6箇所を作り、鉄道による運搬を始めるとのことでした。

以上見てきたように、ナホトカでは旧来の港湾施設に加えて新しい施設を作るとともに、新港湾に直結する鉄道を複線化して増強する工事も進めています。ナホトカ湾全体で年間3500万トンの取り扱いが可能な港湾があるにもかかわらず、それらは天然資源を輸出し、工業製品を輸入するためのものになっています。輸送に有利な条件を生かした産業の発展はまだこれからであることがわかりました。ロシア極東地域では日本車の中古車が大きなシェアを持っています。ロシア政府は今年から、国産車の競争力を高めるためにヨーロッパロシアからの新車の輸送費への補助金を新設したほか、輸入車への関税の引き上げを行っています。日本の自動車産業としては、日本で生産した部品を極東に持ち込み、ロシア国内で組み立てることによりこの関税を回避することが必要となります。そのような産業の立地場所として、ナホトカやウラジオストクが大きな可能性を持っています。今後の両都市の動向に注意が必要であることを痛感した見学旅行でした。

（奥村 誠）



ボストチヌイ港コンテナ専用岸壁

スタンフォード大学フーヴァー研究所のロシア史関連史料

米国カリフォルニア州スタンフォード大学内の「戦争、革命、平和に関するフーヴァー研究所」（1946年からの正式名称）に8月末から1週間あまり通って調査した。蒋介石日記の閲覧で3度目の訪問となりフーヴァー研滞在のヴェテランで、科研費で共同研究を実施している上野准教授に同行したが多くを教えられた。1929年の大恐慌勃発時の第31代大統領ハーバート・フーヴァーが、第一次大戦に関する貴重な史料の保管場所として戦争直後に母校に設置したフーヴァー戦争コレクションに端を発するこの研究所には、フーヴァーが商務長官として、飢饉に苦しむ革命後のロシアへの大々的な食料援助を指導したように（第二次大戦後の日本も視察して食料援助を提言）、ロシア関連史料が豊富なことでも名高い。ソ連崩壊後、フーヴァー研究所はロシアの一部公文書館と協定を締結し、ロシア所蔵史料のコピー作成事業も進めたが、当研究所保有の亡命ロシア知識人が残した著作、書簡などの膨大なコレクションは、他で手に入らないだけに極めて貴重である。例えば満洲に居住していた亡命ロシア人の情報などである。ロシアでは申請

二日後の文書閲覧というのが通例だが、ここでは申請直後の閲覧が可能であり、快適であった。目録もインターネットで公開されており文書の探索は比較的容易である。将来的な研究の足掛かりとして、短期間ではあったが有意義な滞在であった。休日には上野氏にサンフランシスコ市街を案内していただいた。東洋のサンフランシスコと呼ばれるヴラディヴォストークの「本家」を初めて訪問し、なるほど坂の多い美しい町だと感じたが、「ロシア丘」からの絶景を眺めながら、東方ルートの亡命ロシア人がおそらくは最初に合衆国に足を踏み入れ、住み着き、ロシア語の日記も刊行されていたサンフランシスコで、彼らは故国ロシアをどのように見ていたのだろうかと考えざるをえなかった。

（寺山恭輔）



フーヴァー研究所閲覧室

中国の温暖化対策は進んでいる！

最近、温暖化関連の会議やシンポジウムに参加する機会が多いです。そこでは、常に中国の動向が焦点となっていて、「CO₂排出量は世界1位で、米国を追い越した」「中国は温暖化対策には自覚が薄く、国際社会の足を引っ張っている」というのが一般的な共通認識になっているように思います。

しかし、このような認識は、必ずしも正しいとは言えないと思います。逆に、中国は温暖化対策に熱心だとも言えます。なぜなら、実際には、世界的に見ても野心的な省エネ目標や自然エネルギー導入目標を掲げていき、エネルギー効率の悪い工場を次々に強制閉鎖するなど、大量の失業者を出すような痛みを伴う大胆な改革も実行しています。経済が成長し人口は増えているのに、国内総生産（GDP）あたりのエネルギー消費量は大幅に下がっている。これは、他の先進国の高度成長期にはなかったことです。

中国でもコスト無視の国営企業が幅をきかすような時代は終わりました。国際競争力を持つ産業を育て、経済発展を続けるためには、エネルギーコストを削減することが不可欠です。たとえば鉄鋼のトップ企業は、先進国の省エネ技術を取り入れ、ほぼ同レベルのエネルギー効率を達成しています。

もちろん、CO₂排出量は増え続けています。しかし、中国は人口増加中の巨大な途上国です。貧しい人たちは非常に多い。例えば、まだ約3千万人が電気がない生活をしています。このような人たちに、子供も豊かな生活もあきらめて、

電気は永遠に使うなど言うのは難しいと思います。

都市と地方の格差は、中国政府にとって深刻な問題です。格差解消や民生安定のためにも進めているのが、自然エネルギー活用による電力の普及です。太陽光や風力の利用は、今や世界トップレベルで、太陽熱温水器の生産量、利用量はともに世界一になりました。

2013年以降の温暖化対策国際枠組み交渉に関する中国政府の考え方について言えば、他の途上国の人々も同じ考えですが、彼らは議論の前提や進め方が不公平だと感じています。中国の1人あたりの排出量は、米国の5分の1で日本の半分以上です。しかし、しばしば人口規模や1人あたりの排出量を無視して、総量や増加率をもとに一方的に議論が進められます。温暖化問題はエネルギー問題であり、資源の分配問題でもあります。例えば、限られた水や食料を世界で分配すると、人口を無視して国ごとに等量に分配することなど考えられないでしょう。

そう言っても、温暖化対策に熱心な米国・オバマ政権の誕生で、中国政府は姿勢を変化させています。温暖化対策がエネルギー安全保障確立につながることも、中国が受ける温暖化被害の甚大さも、そして自分たちがどう、かじを切るかが大きな意味を持つことも認識しています。公平性を強調しながらも、落としどころを探っていると思います。

(明日香壽川)

◆ 客員教授紹介 ◆

Dashi D. Darizhapov (ダシ ダリチャポフ) 教授



ロシア科学アカデミー・シベリア支部、ブリヤート科学センター、物理学部、リモートセンシング研究室長

私は佐藤源之教授のお招きでロシア科学アカデミー・ブリヤート科学センター（ウラン・ウデ）から客員教授として赴任いたしました。ブリヤート科学センターにはモンゴル仏教・チベット研究所（IMBT）、バイカル自然管理研究所（BINM）、一般・実験生態研究所（IGEB）、地質学研究（GIN）の4研究所と物理学研究部（DPP）があります。東北アジア研究センターで新しくお目にかかる方、研究者と新しい環境での研究を通じた成果をあげたいと考えています。私はロシア

科学アカデミーでリモートセンシングの研究を運営しています。私の研究室では欧州宇宙機構ESAの衛星ERS1、ERS2（1994-1997）、NASAの2000年のスペースシャトル、日本の宇宙航空研究開発機構（JAXA）が運用するALOS（だいち）搭載のPALSARセンサ（2006-2008）などの衛星でシベリア地域を計測したデータを収集し、データベースを構築してきました。研究所ではいくつかの国際共同研究に参画し、上記衛星の校正のため、2mの大きさの金属製反射鏡をバイカル湖周辺に設置するなどの活動を行いました。これらのデータはセレンゲ川流域の植生分類や、地表面の電気的性質の把握などに利用しています。

Erdene. Purevjav (エルデネ プレブジャブ) 教授



8月1日に、モンゴル国科学アカデミー言語文学研究所の研究員エルデネ・プレブジャブ（Erdene Purevjav）先生が客員教授として本センターに赴任された。

先生は、同研究所の言語学部門に所属し、モンゴル言語学を専門として、モンゴル語の辞書・学習書の編纂、モンゴル言語学の研究史、チンギス・カーンの伝説や、西部モンゴルの口承文芸・方言研究など、活動の範囲は広い。また、モンゴル研究の国際組織である国際モンゴル研究連盟の常設事務局で出版担当委員を、モンゴル国のモンゴル研究連盟の事務局の書記を務めるなど、モンゴル研究者の連携の中心で活動されている。

先生は、1995年から2001年まで大阪外国語大学の客員教授を勤められ、その経験を生か

して編纂された『現代日本語モンゴル語辞典』（春風社、2001）、『モンゴル語ことわざ用法辞典』（大学書林、2006）等の辞典は、日本のモンゴル語学習者に大きな便宜を提供してきた。

今回、客員教授として本センターに勤務し、「モンゴル語近代辞書の研究」をテーマに研究を進めている。これは1930年代に編纂されたものの、出版されずに保存されていたモンゴル語辞書の筆写原稿をもとに、その整理と研究を行っている。

先生の所属するモンゴル科学アカデミーと本センターとは2000年に学術協定が締結されており、今回の先生のご着任は言語研究の分野において互いの協力を進める上で大きな一歩となることが期待される。（栗林 均）



地球上の新種の火山・プチスポット海底火山の調査

東北アジア研究センター 助教 平野 直人

火山の噴火や巨大地震の発生など地球の主な地学現象は、地球表面を覆ういくつかの岩盤（プレート）どうしが移動することによって生じます。このプレートテクトニクスという概念は、60年代中盤以降世界で広く認められ、我々が暮らす地球上のあらゆる地殻変動の根幹概念となっています。

私は、2008年12月に東北アジア研究センターに赴任するまで、陸上の地質と深海底の調査とそこから採取された岩石の化学分析を行い、生きている地球の証であるプレートの動きを調べてきました。とくに私が研究している玄武岩という火山岩は、プレートを作り出す中央海嶺（海洋底の中央に位置する火山列）や、日本列島に多く存在する火山に代表される、いわゆる島弧型の火山など、多くの場所でマグマとして噴火しています。そしてその玄武岩の化学分析を行うことにより、火山がいつ活動したか、プレート配置のどの場所で火山が活動したのかを知ることが出来ます。

地球上に存在する火山は、次の三つの場所で活動していることが知られています。

- (1) 大西洋中央海嶺に代表されるプレートが形成される場所
- (2) 日本の火山に代表されるプレートの沈み込み帯に沿った場所
- (3) ハワイ島に代表されるプレートの配置とは無関係に存在するホットスポット火山

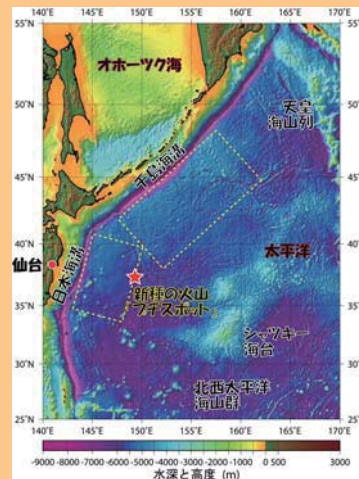
このうち(1)はその多くが太平洋・大西洋などの深海底に巨大な火山列として存在し、海底のプレートの生産地となっています。一方で、生産された海洋プレートの多くは1億年以上かけて移動し、三陸沖の日本海溝（図一地形図）の様な沈み込み帯と呼ばれる場所で地球内部へ沈み込んでゆきますが、例えば日本に存在するような火山(2)は、沈み込んだプレートが原因で火山列を作ります。東北地方の火山の分布が脊梁山脈に沿って日本海溝に平行に列んでいるのはこのためです。(3)の火山はプレートの位置よりも深いマントルの深部からマグマが上昇する場所で、プレートの真ん中に火山が「点」として存在するため、ホットスポットと呼ばれています。これまでの地球科学では、火山はこれら三つのタイプで全て説明されてきました。ところが、三陸沖の深海底（図一地形図の星印）にこれらのどれにも当てはまらない新種の火山が発見されました。私はこの新型火山を「プチスポット」と名付け、地球上の第四の火山形成場として成因の解明を行っています。

図をご覧ください。日本海溝や千島海溝に囲まれた区域は、プレートテクトニクスの世界では「太平洋プレート」と呼ばれ、北米の西海岸北部やイースター島付近にまで広がる巨大なプレートの分布範囲です。この太平洋プレートが海溝から地球内部へ沈み込むことによって、東北地方や千島列島、カムチャツカ半島の火山列が作り出されます。一方で図中の千島海溝や日

本海溝の沖合（黄色の点線で囲んだ部分）に、地形の高まりが存在しています。これは、それまで水平方向に移動していた太平洋プレートが海溝で沈み込むことにより岩盤が折れ曲がるためにできた、およそ1000m前後のプレートの盛り上がりです。新種の火山・プチスポットはその盛り上がりの突入部に位置するため、このプレートの折れ曲がり原因となつて亀裂が生じ、火山が形成されたと考えられます。

現在、海底の音響測深データや潜水調査船などを用いてこれらの未知の火山を探査し、採取された溶岩の化学組成を行い、火山の成因を調べています。また、今年秋には二ヶ月かけて、海底掘削船「JOIDES Resolution」号（写真）に乗船し、シャツキー海台（図）の調査を行いました。地形図をご覧になってお分かりのように、シャツキー海台は日本列島の面積に匹敵し、現在の火山活動からは想像できないほど巨大なものです。この火山は1億数千万年前に形成されましたが、ほぼ同時期に活動した超巨大火山体は地球上でいくつか発見されています。その噴火活動はとて大規模であったため、当時の地球環境にも影響したとも言われています。

このように、我が研究室ではプレートの動きと、それに伴う火山活動の変遷を調べることにより、躍動的な地球の真の姿を明らかにしようとしています。



日本列島・極東ロシア沖合の太平洋海底地形図



横浜大黒埠頭に停泊中の JOIDES Resolution 号
(2009年9月, 写真提供: Mr. John Beck, IODP, TAMU)

編集
後記

42号は東北アジア研究センターの理系、文系の研究者が各地で行うフィールドワークに焦点をあてました。もちろん、国内のフィールドワークも盛んに行われていますが、今回は最近の海外での活動について寄稿してもらいました。
(寺山 恭輔)